

第3回ライブニッツ研究会発表要旨

観ることと、在ること —ライブニッツ『モナドロロジー』読解の一つの試み—

清水 洋貴（筑波大学）

いわゆる『モナドロロジー』という著作において、形成 [=形相を与えること] (formation) されるものではなく、形成するものの系譜は、「種子 [=精子] (semences)」(第七十四項) から「モナド (monade)」、さらには複数の可能世界の「アイデア (idées)」(第五十三項) へと遡源されうる。ここでは、「種子」と「モナド」とは同一の事物ではないし、「モナド」と「アイデア」もまた同一の事物ではない。この三者の、それぞれの固有の役割と、相互の連関とが問題となる。

まず、「種子」に関していえば、ここで注目すべきは、「種子 [=精子]」と「受精 [=妊娠] (conception)」という、この一対である(第七十四項)。「自然の有機体」は、「種子 [=精子]」から「産出される」。この「種子」のうちには、そのうちに「何らかの予先形成 (quelque préformation)」が在る。すなわち、すでに「有機的身体」だけでなく、「この身体の中の魂」も在る。これに対して、「種子 [=精子]」を受け取ること、すなわち「受精 [=妊娠]」によってなされるのは、「種子」のうちにある「動物」が、「別の動物」へと「一つの大きな変形 (une grande transformation)」をするために「たんに態勢づけられた」(cet animal a été seulement disposé)、ということなのである。ここには、「形成」するものの優位と、「形相」の新たな受容の拒否という思想が読み取れるのではないか。

つぎに、「種子」と「モナド」との関係についていえば、つぎのようになる。「種子」の内に在る「魂」あるいは「形相」とか「エンテレケイア」というものは、一般的には、「モナド」という名で一括されうる(第六十三項)。すなわち「モナド」は、「エンテレケイア」であるか、あるいは「魂」である。「物体」(le corps)は、「エンテレケイア」とともに「生命体」(un vivant)を「立ち上げ」(constituer)、「魂」とともに「動物」(un animal)を「立ち上げる」。この「立ち上げる」ということは、別の場面では、「モナド」が「合成されたもの」(les composés)の「内に入り込む」(entrer dans)、と言われ(第一項)、あるいは、「合成されたもの」は「単純なもの」「と釣り合う」(symboliser avec)、と言われる(第六十一項)。「モナド」という「非物体的機械」(第十八項)が「入り込む」のは、「合成されたもの」である。それは、「人工的な機械」ではなく、「生命体の有機的な身体」すなわち「或る種の神的な機械、あるいは自然的な自動機械」である(第六十四項)。「機械」という一貫したメタファーを切り口として、「モナド」およびこれが入り込んだ「生命体」あるいは「動物」の領域は、解読されうるだろう。

最後に、「モナド」と「アイデア」の関係についていえば、ここで注目すべきは、「秩序」(l'ordre)の由来ということである。「宇宙 (l'univers)」は「完全な秩序のうちに規制されている」。こ

の「宇宙を表現するもの」(le représentant)、すなわち「魂の知覚 [=表象]」のなかにも「秩序」があり、その帰結として、「それに従って宇宙が魂の知覚において表現されるどころの、身体のうちにも秩序があるはずである」(第六十三項)。「秩序」を有する宇宙全体は、「物質」あるいは「身体」という領域が表出するのであり、さらには、この領域のなかでも「特別に自分に属する身体 (qui lui est affecté particulièrement)」を「モナド」が表現するのである(第六十二項)。ただし、ライプニッツ自身が注意するように、「モナド」がその「内に入り込んでいる」どころの「物質」あるいは「身体 [=物体]」というこの領域は、「川のように永遠の流動状態にある」。「どの魂にも、永遠にそれに固有の、それに割り当てられた物質 (la matière proper affectée à elle pour toujours) の塊や分け前がある、と思いついてはならない」(第七十一項)。「モナド」は「自分なりの仕方で宇宙を映す鏡 (un miroir de l'univers à sa mode)」である。「神」が選んだ「宇宙」が「秩序」を有するがゆえに、「物質」は「秩序」を「表現」し、「モナド」という「鏡」にも「秩序」が映っているのである。この現実の「宇宙」の「秩序」の起源、それは「無数の可能的宇宙」の「イデア」である。「モナド」だけでなく、「物質」もまた表現する。このことの意味が解釈されねばならないだろう。また、「神」の有する「イデア」の領域と、「モナド」との関係もまた説明されねばならない。